

## 1997 Humanities / Outline

ジャンルとしては音楽史。西洋古典の影響が強く見られる。「音楽の不思議な力」という題名が示す通り、論文全体に渡り、音楽のもたらすものが「オルフェウス」の例を中心に展開されている。論文の流れとしては

- 1.見直されてきた音楽の力、音楽のもたらすもの
- 2.オルフェウス
  - a.モンテヴェルディ b.グルック c.(バーセル、モーツァルト) d.オッフエンバック
  - e.リスト f.コクトー
- 3.プラトン、アウグスティヌス
- 4.結論

となっており、2の部分が非常に長いことが特色となっている。この論文は西洋古典(特にギリシア神話)の知識があると読みやすいが、そうでなくても各事項わかりやすく述べられており、親しみやすい論文となっている。

設問の一部は問われている意味があいまいであったり、論拠が無く答えにくい問題が含まれる。また、解答の候補が複数あり、絞り込みに時間がかかる選択肢もいくつか点在している。このような問題は素直に飛ばし、丁寧に読めば確実に正解できる問題を優先的に解答したい。確実に解答できる設問を確実に得点することで、合格点は十分に取れる問題である。

なお、この論文には章番号が打たれていないので、解答個所を段落で表記する。段落の最初(字下げしている個所)に段落番号(1-20)を振ってから解答を読んでもらいたい。参考までに各段落の始まりは以下のページとなっている。

1P(1,2)2P(3,4)3P(5,6,7)4P(8)5P(9,10)6P(11,12)7P(13,14)8P(15)9P(16,17)10P(18)11P(19,20)

## Answers

1. - a (1段落)

いきなり論拠の探しにくい問題。飛ばす。

はっきりって文中には「音楽学が必ずしも、音楽についての根源的な問いに対して積極的ではなかった」ということの論拠はない。よって類推によって解くしかない。消去法で「間違いではない」選択肢を探す。

- a 音楽の力は古くより認められており、音楽の持つ力を歴史的な考察を交えて論じているのがこの論文の目的である。また、1 段落最後の「音楽にそうした力があることについては、経験的に確かなことであろうと誰しも納得しているに違いない。」という記述からも、経験から納得しており、研究の対象にならなかったという内容を読み取ることも可能か。
- b 論文中において音楽の芸術的な価値は認められており、不適當。
- c 「音楽の体験は抽象的」という記述もないし、「記録しにくい」などという記述は一言も出てこない。
- d 音楽学が音楽の商品化に関してどのように考えているかと言う記述はない。  
よって a のみ論文と矛盾しない。

## 2. - b (2,3 段落)

例を元に、筆者がこれから何を論じようとしているのかを注目。また、消去法によっても容易に解答可能。

1 段落で「最近の例」として、「癒し系 CD」の発売が紹介された後、2 段落において「そして最近では、人間のみならず、動物（乳牛にクラシック音楽を聞かせる話）、植物（木や花に音楽を聞かせる話）、そして、日本酒（発酵の時に音楽を聞かせる話）などに関して、音楽の持つ説明し難い効果についての話題が、しばしば新聞の紙面を賑わせている。」などと述べられていることから、最近になって音楽の持つ力があらためて見直され、話題になっているという状況が述べられている。癒し系 CD の発売も最近の動きのひとつであり、選択肢 b のように「音楽の力を改めて考え直す機縁を与えている」ことは明らかであろう。

- a 商業化の是非は論文で問われていない。
- c 科学的研究の成果、というよりも音楽の持つ経験的な効果が研究を進めるきっかけとなっている。
- d 科学的説明と経験との重要性の比較はなされていない。

## 3. - c (2 段落)

解答の絞込みが重要。

消去法で a, b はすぐに消せるであろう。

- a. 「最も感動的」などとは述べられていない。  
 b. 「動植物に対しても有効」という記述は無い。

問題は c,d となるが、d に関しては確かにそれらしい記述がある。しかし筆者がこの例から導き出した結論は「日本でも稀に体験可能」などというものではない。筆者の結論は「心の琴線に触れる」という表現があるように、音楽あるいは音が、人の心の奥底にある情動に直接働きかけて、何らかの反応を引き出すということは、時代や国の違いを問わず、真実であると言えよう。」という部分である(2段落)。また、この部分は、音楽の根源的な力を論じていこうとする筆者の態度を補強している。よってこの結論から読み取れる可能性のある選択肢は c の「今日の音楽学者に、音楽の根源的な問いに答える勇気を与えるもの」である。昔から人々は音楽の根源的な力を認めてきたというひとつの証拠であり、音楽学者が研究するに足る題材であると確信させる論述であると言える。

#### 4. - a (3段落)

解答困難。飛ばす。

選択肢が極めてあいまい。質問は要するに「カーペンターズの Yesterday once more」の例に見られるように、音楽家自身が音楽の力をテーマにした作品を作るのはなぜか、ということを知っている。3段落の記述より、「音楽の持つ力によって(特に懐かしさ)その音楽を聴く人の共感を得るため」であるということは明らかであろう。しかしながらこれにすっきり当てはまる選択肢がない。が、もっとも近いのは選択肢 a である。「芸術の力が客観的に意識されている」ことから、このように音楽の力を意識した作品が生まれると一応は解釈できる。いずれにしてもすっきりしない問題であり、読み方によっては他の選択肢も正解となり得る問題である。あまり時間をかけず、素直に飛ばすべき。

#### 5. - b (3段落)

実例の結論より、容易に解答可能。

3段落に

「この曲を歌ったカレン・カーペンター(1950 - 1983)の素晴らしい歌唱力もさることながら、この歌の内容に共感した人も多いのではなからうか。」とあるので、歌の内容が共感を呼ぶ、という選択肢 b を選ぶのは容易である。

## 6. - c (3 段落)

結論がどのような実例からもたらされたかを考える。

## 3 段落より

「さらに、同じことは、個人の集合である社会の記憶という見地からも考えることができるだろう。例えば、…」とあり、その実例として第 2 次大戦中のヨーロッパ戦線で歌われた「リリ・マルレーン」、敗戦直後の日本の流行歌である「リンゴの唄」、ナチスドイツの迫害の象徴である「ワーグナーの音楽」が登場する。これらの事例の共通点を考えると、選択肢中で最も適当なのは c の「苦難の共有」であろう。

## 7. - d (3 段落)

知識問題。

知識問題というより、一般常識を問われている。ナチスドイツに迫害されたのはユダヤ人であり、イスラエルは第 2 次大戦後に建国されたユダヤ人国家である。ただしフランスも歴史的にドイツとは犬猿の仲。

## 8. - a (18 段落)

該当箇所が結論部にあり。飛ばす。

この問題は最後まで読まないで解答できない。とりあえず飛ばして、後から解答する。

## 18 段落に

「西洋の伝統においてオルフェウスによって象徴されてきた音楽の力は、まさに古今東西を問わず、人間が存在することと切っても切れない、真に普遍的な存在なのである。そして、人間が存在することの意味が問い直される時ほど、そうした音楽の持つ不思議な力が強く意識されるのではなからうか。」という記述があり、人間の存在と深く結びついているという a の内容が読み取れる。いずれにしても突然結論部を聞くような問題は無理に解答せず、一通り問題を解いてから解答すること。

## 9. - d (6 段落)

オルフェウスの物語の中で最も記憶に残るシーンが、なぜそうなり得たのかを考える。

6 段落にはっきりと記述されている。

「特に、オルフェウスが妻エウリュディケを音楽の力で冥界から救い出そうとする行為と湯面は……人間の夫婦の関係という、きわめて普遍的なテーマであることも手伝って、その後のオルフェウスの物語の伝承の中でも、特に、人々の記憶に残る部分となったのである。」

夫婦のハーモニー、つまり夫婦の関係を描いたものとして格好の題材であるとする d が正解である。

#### 10. - c (8 段落)

モンテヴェルディの歴史的背景に関する記述より解答。

8 段落より

「…ルネサンス時代には考えにくかった…」 「…バロック時代の幕開けにふさわしい壮大な作品となった。」

c のルネサンス時代の終わり、バロック時代の幕開けという位置付けは明らかである。

#### 11. - d (8 段落)

休止符に関する筆者の論述より解答。

8 段落より

「また、オルフェオの、言葉にならないため息の表現としての一瞬の休止符の存在は、どんな音を当てはめるより雄弁である。」

とあるので、音を表現するとしている b,c はすぐに消去できるであろう。残りは a と d であるが、本文中では休止符が言葉に対抗して自己主張しているという a の内容は読み取れない。残った d が間違いではない選択肢ということになる。

#### 12. - c (8 段落)

文中に論拠を探することは難しい。選択肢を吟味して答える。

8 段落の記述より各選択肢を検討する。いずれにしても問題に「推測できる」とあるので、オルフェオという作品全体を筆者がどのように捕らえているかで判断する（推測だけなら

どの選択しでも解答となり得る )

a 確かに声と声楽の総合が実現されているが、これは「オルフェオ」を選んだからではなく、オペラと言う表現がそのような形態をとるからである。

b 6 段落に「第 3 幕では、カロンテを説得しようとするオルフェオの歌の見事さはもとより、様々な楽器による音楽を歌の合間に挿入することによって、まさに文字通り、音楽の芸術の豊かさを表現している。」とあるが、これは前述の 2 幕の休止符の対比となっている例であり、第 3 幕の歌と音楽の融合においては正しいが、「オルフェオ」全体を通して通じる事実であるとはいえない。

c これが一番無難か。「こうして、『オルフェオ』は、個々の登場人物の語りの音楽、合唱との対比、多彩な楽器の音色の変化によって、音楽による言葉の劇的な表現の典型とも言うべき作品となり、バロック時代の幕開けにふさわしい壮大な作品となった。」とあり、2、3 幕などの例から、音楽による言葉の劇的な表現の典型、というモンテヴェルディの作品の結論が示されている（ただし本人がそれを意図したかどうかは推測の域を出ない）。

d 天才的手腕は確かに発揮しているが、それを意図して作品を作ったとは読み取れない。

#### 13. - a ( 10 段落 )

モンテヴェルディとグルックの作品の比較より解答する。

モンテヴェルディとグルックの作品は 10 段落において比較されている。

「前者では、あくまでも音楽の英雄オルフェオ個人が担った苛酷な運命と伝統的な音楽の力という主題が中心になっているが、後者では、夫と妻の関係、あるいは両者の間の愛という主題に一層力点が置かれている。」

モンテヴェルディの 1 幕に相当する部分が省略してグルックの作品が始まるということは、夫婦の愛というグルックの作品のテーマに集中するためであると考えられる。

#### 14. - c ( 10 段落 )

モンテヴェルディとグルックの作品の比較より解答する。

前問と同じ個所が該当するが、モンテヴェルディの作品は「個人が担った過酷な運命と音楽の力」、グルックは「夫婦の関係、愛」がテーマになっている。選択肢の中にはきれいに当てはまるものはないが、c の「神の意図（つまり運命）と人間関係の思い（つまり夫婦の関係）」がもっとも近い。また、他の選択肢はいずれも本文から読み取れない内容を含む。

a 父権の維持というテーマはモンテヴェルディの作品では述べられていない。

- b 違和感・共有はどちらの作品からも読み取れない。  
 d 結果としてグルックはモンテヴェルディの作品にみられる伝統的手法を逸脱したのかもしれないが、「伝統の遵守と逸脱」ということ自体は両者の作品のテーマではない。

## 15. - c (10 段落)

両作品の時代背景の違いに注目

10 段落の結論部において、筆者は両作品は 1 世紀の間に男女の関係や女性観に変化が起こったとしている。そしてその背景には 18 世紀の啓蒙思想の発展があるとされている。よって両者の作品の違いにおいて、注目すべき点は社会の変化であり、その背後には啓蒙思想の発展というものが大きく関与しているものと言える。

## 16. - d (11 段落)

日本でのグルックの作品の結論より解答。

可能性としては c と d であろう。しかしながら筆者の言わんとすることは c のような表面的なことではなく、選択肢 d の内容である。つまり、11 段落の結論部にあるように、西洋文化の受容が今ほど進んでいない明治時代においても、グルックの作品は感動を与えたわけであり、このような西洋文明の受容の原点を考えると近代日本の原点をさぐる意味で重要であるとされている。

## 17. - c (10 段落)

該当する選択肢がないので、グルックの例の結論より解答。

例によって「推察できる」ものを探す問題であり、はっきりと該当する選択肢がない。11 段落の日本におけるグルック作品の上演の例からは、「西洋文化受容の原点となった」という内容は読み取れるが、選択肢を絞り込むことはできない。よって筆者がそもそもグルックの作品にどのような重要性を見出しているか、というところから解答するしかない。問い 15 とも関連するが、10 段落において、筆者は、夫婦、男女の関係の変化、女性観の変化、そして啓蒙思想の発達という点を挙げている。このような内容が読み取れるのは選択肢 c の「夫婦観の相違」である。本文から、男女の関係を啓蒙思想の影響を受けて描いたグ

ルックの作品が、明治時代の日本の観客にどのように受け取られたかということを筆者は関心を持っているであろうということが推察できる。

18. - a ( 12,13 段落 )

2 人の事例に共通することを選ぶ。

12,13 段落の内容より、パーセルとモーツァルトが音楽的にすぐれた業績を残したことからオルフェウスに比べられたことは明らかであろう。

19. - d ( 14 段落 )

前出の例と通じるテーマを考える。

14 段落の結論部に

「しかし、もともとのオルフェウス伝説やグルックの作品の存在とその理解が、オッフェンバックの創作の前提になっていることを見落としてはなるまい。」とあり、そのグルックの作品に該当するのは選択肢 d である。9 段落の内容からもわかるように、「エウリディーチェなしに…」の場面はグルックの作品を象徴するアリアである。

20. - b ( 14 段落 )

オッフェンバック作品の解説より解答。

19 世紀に上演されたオッフェンバックの作品においては、オルフェーが妻に飽き、浮気をしている。観客にとってこのような行為は笑いとして、あるいは、あり得る状況として受け入れられている行為である。オルフェーの行為をたしなめているのが「世論」であるから、この世論は明らかに同時代のものではなく、古い道徳観に基づいたものであろう。もし世論が 19 世紀のものであるとあるとすると、観客はオッフェンバックの作品を楽しめるオペレッタとしてではなく、不道徳で、不謹慎な作品とみなしていたであろう。よって正解は b の「一時代前の道徳の主張者」となる。

！！注：サンプル版・実際の解説は問 40 まで続きます！！